2019／03／26　09：47：04　文化部
2019／04／21　朝刊　文化　随想　通常版

文化

馬のなかの夜と港

辺見庸

へんみ・よう　作家。1944年、宮城県生まれ。91年「自動起床装置」で芥川賞。2012年詩集「眼の海」で高見順賞。他に「もの食う人びと」「月」など。

黒い巨大な馬が一頭、まなかいをよぎって消えた。うらうらと陽の照りわたる休日の昼下がりに。馬の幻影は毎度のことだから、べつにおどろかず、こだわらない。蒸れた藁と泥んこと馬の汗の、消えのこるにおいが、何十年も鼻孔にはある。

◇　◇　◇

都心にでたら、人もビルも半透明の柔らかな暈でもかかったように円やかに清潔にみえた。都市という怪獣に身がまえる気組み（わたしの癖）が徐々に失せる。カフェでは若い男女がノルウェージャンフォレストキャットというネコの食欲の減退について談じている。「生肉をあげてみたらどうかしらね……」。ナマニクの発音にどきりとする。隣のテーブルでは女性たち三人が全員、うつむいてスマートフォンをいじっている。ワインレッドやオーロラピンクの爪をつけた細い指たちが液晶画面をツルツルとすべる。

静かだ。いま、砲声はない。銃声もない。血のにおいも悲鳴も硝煙のたなびきもありはしない。だれもテロやその犠牲者の話なんかしてやしない。移民や難民やかれらとのつきあいかたなんぞ話題にのぼってはいない。だいいち、どこからも口論や諍いの声が聞こえない。

やがて気づく。女といい男といい、客らの面差しの似たようなきれいさ、ある種の規格どおりの端正さに。声音と口ぶりの、まるでおなじ音譜を謡うような共通の調子に感心し、少し戦く。が、顔や声とはかって、もっと各人各様の凹凸と輪郭があり、それぞれに尖ったり、凪いだり、時化たり、決壊したりするものではなかったのか。

◇　◇　◇

自動ドアがひらく。視線をむける。爆発的な光の束が斜めに侵襲してきたので、すぐに目を瞑る。直前、光を背負った影をみた気がする。一刹那、血まみれの子どもを抱いた母親が飛びこんできたのではないかと錯視し、ただちにうち消す。

ふといぶかる。その昔、ひとはなぜ老け顔をしていたのか。まだ十代、二十代なのにすっかり老成したかのごとくにふるまい、「存在の証」についてしかつめらしく弁じたりしたのか。なぜそうできたか。逆に、いまはなにゆえこんなにも若者がから、なにかがせりあがってきたり、すーっと引っこんだりしている。風景と声と息。脚の太い老いた黒馬がまた目に浮かぶ。肥え桶かなにかの重い荷をひく馬が、疲労か病気のせいだろう、凍りかけた泥道でよろけている。ほれっ、ほれっ、ほうほう……自つきの鋭い馬方がかん高い声で叱し、容赦なく鞭をやる。ほれっ、ほれっ、ほうほう……黒馬は赤い血の筋を走らせた目をむきだし、黄色い歯の奥から真っ白の泡を吹いている。馬はやがてつんのめり、二、三度地を掻くように蹴ってからたち崩れ、どうと泥のなかに倒れる。その振動で大地が揺れ、空気がびりりとひきつった。

◇　◇　◇

馬の横顔はいまや眼下にあった。鰓がまるで汀線のように長大で、その曲線は優雅に、いや、おごそかにさえみえた。馬は歯ぐきをむきだし、苦悶のためか、口とおとがいが左右に大きくずれている。しけった藁と、馬糞、いがらっぽい汗のにおい、剣呑なかけ声…それらの混合がそのとき、世界中のすべてをつつんだ。幼児のわたしはそう思ったものだ。そして、轡をこれでもかこれでもかとひっぱる馬方の横顔、筋ばった首…。かれは、まだ若かっただろうに、ずいぶんと老けてみえた。全力で世界と戦っていた。ほれっ、ほれっ、ほうほう…。

その風景のなかにつつまれる、わたし自身をふくむ、すべての存在物（の実在性）をわたしはまったく疑わなかった。風景には風景をソフトにみせる皮膜やフィルターがなかった。意識するまでもなく、そこに「存在の不確かさ」なんかなかったのだ。在るものは、ありていに在った。人だかりができていた。だれもがみすぼらしい服を着ていた。だれも撮影するものはなく、だれもスマートフォンなどもってはいなかった。

いらだつ馬方はときどき、いとけない目をした。かれは泥だらけのゴム長の足で思いきり馬の首を蹴った。ドスッと鈍い音がした。バカ、起てー　バカ、起てー　半ばべそをかきながら、なんども蹴った。馬は聖者のような目をみひらいたままビクともうごかなかった。たぶん、その場のだれも、ひどいことをするとは思わなかったろう。やめなさいと忠告する見物人もいなかった。わたしはうちたおれた馬と若い馬方のいる景色の、善し悪しではなく、聖性さえはらむ生と死の気配に打たれた。

老馬は葡萄色の舌を垂らし、あえぎながら口からもわもわと青白い霧を吐いた。馬方の顔は哲人のようにも嗜虐者のようにもみえた。潮の香りがうすくただよっていた。

その風景に立ち会えたわたしはじつに幸運であった。乱暴な仕儀にも強烈な愛に似た感情の点滅があると感じることができたのだから。倒れた老馬を基底にしたシーンはなによりも、疑いようもない原質そのものであった。遠くに漁船の汽笛が聞こえた。

それらの声と音とにおいは、おそらく、死にゆく馬のなかの夜と港からただよっていたのだ。